

巻頭言「大転換」の時代における多元思考の統合化

著者	牛津 信忠
雑誌名	聖学院大学総合研究所紀要
号	65
ページ	3-7
発行年	2019-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1477/00003611/

巻頭言 「大転換」の時代における多元思考の統合化

聖学院大学総合研究所
心理福祉総合研究センター長
聖学院大学客員教授
牛津 信忠

『1984年』⁽¹⁾というジョージ・オーウェルの未来小説が近年よく読まれ、その映画化作品も広く鑑賞されているという。この作品は一九四九年に刊行され、その当時の恐怖政治を念頭に置きながら、現代社会のもつ危険な側面を未来のこととして表現して当時の人々の心を揺さぶった。そこには明確にならないままにおぼろげに人々の心に張り付いた権力性ないし権力のもとで隠された民衆コントロールが描かれている。支配下の民衆は、いつの間にか独裁のなかに取り込まれ、それが当たり前であるかのように感じさせられてしまう。ここでは日常の平凡な生活と独裁による枠づけの生活との二重性が同一視され混同されていく。五本の指の一つを隠すと2+2=4となる。しかし2+2でも5となるという解が示されるとそれを受容してしまう。ここには隠蔽操作による「二重性」ないし「二重思考」が成立している。⁽²⁾ 隠されていることに、また知らされない事実に気づくことが必須であるが、その事実を見据える目が覆われてしまい、事実とは異なる解を信じ込まされてしまう。このような操作状況のなかで、自らの生への恐怖、その原因とされる敵という位置づけをもつ対象の設定が

なされそれに直面させられると思いがけない尖鋭化を許す結果をもたらす。

かつて、カール・ポランニーが『大転換 (The Grate Transformation)⁽³⁾』という著書を出版したが、現代においてはそこに述べられた市場経済の転換状況、まさにその潮流のなかにあるとも思える事態が露わである。経済構造を社会の基盤として注視するとき、市場秩序という辛うじて保たれていた自由競争や、交換の軸となる貨幣等、その基本的脈絡の危うさが顕著である。その定まらぬ事態の為、上述したような曖昧さの為に嘘に結果する解ないし二重思考が各国に蔓延し、人々を翻弄している。経済・社会が動揺し、恐れと迷いの多い時代において人々は強力な力を求めていく。こうした時代にポランニーのもう一つの著書『人間の経済 (The Livelihood of Man)⁽⁴⁾』の内容を再確認したい衝動に駆られる。それは公的経済・私経済とともに、先史時代からの共セクターといえる経済の姿をわれわれに提示してくれる。それぞれを現代における構造・機能に置き換えて捉えると、ポランニーが示すように再分配、交換(市場)という機構、そうして互酬という様態として集約することができる。大転換の迷いのなかで、われわれはこの三つの選択肢を与えられており、少なくとも、この選択肢の相互調整という課題に可能性を託することができるように思える。このなかで、平易に表現すると「誰の経済状態をも低下させることなく他の誰の経済状態の向上をもなし得ない状態」を最適と考える、とする周知の最適基準が現代においても意味をもっているが、これも近代の流れのなかで富の平等分配への近接を前提にするという課題に直面することが多く、これに応答することによって先進諸国においては危機を乗り越えてきた。危機克服のためには、再分配政策の導入が必須であり、機構に対する公的介入を是とすることになる。この公私のバランスの上で成り立つ経済にも財政問題をはじめとして大きな危機が訪れ、迷いを増幅させている状況にある。この時代において、われわれは、政治、経

済、社会の事柄の混在において前述のおぼろげな二重思考の渦のなかに陥って、気がつくとも自らを枠づける独裁のなかにあるという、オーウェルが描くような世界に居住しているということにならないようにしなければならない。われわれには一人一人の思考が許されており、自ら自主的自発的に道を歩むことができる。それには、描かれたおぼろげさのなかに隠蔽された二重思考ではなく、各様な事象に内在する多様で対立し合う思考をそれぞれに見定め、そこにある多元性あるいは両極を存立させ統合していくことのできる内実を一人一人の存在を尊重するなかで捉える思考の育成が求められる。それは個人的なそれぞれの存在を軽んずることなくその個的存在の開花を目指して相互に努力していく行為とそれを支える思考のなかに成立していく。いかなれば、多様な状況とそのなかに生きる多様な人々の一人一人の存在状況を愛による統合性によって位置づけていくことのできる思想と行為の確実化が求められる。それを可能にする基礎構造的な側面を問うときに、上述の互酬経済が、先史時代から蘇ってくる。それはしかし現代においては意識的互酬でなければならぬ。社会生活のなかから市民が創り上げ、さまざまな形で築き上げていく社会と経済が心の流れの中で結合した互酬である。しかし、現今、この在り方はともすれば公私経済の補充としかみなされず、脇役として一時しのぎに用いようとする傾向を拭えない状況にある。こうした互酬に全面的に依拠しようとする判断は妥当性を欠き、そこにかえって危機を招じかねない。公が内包する領域への中庸を得た対応、特にニーズ充足を重視するとともに、私セクターに権利と責任の自覚的行使を促し社会性の育成を図ることを前提にする。そのもとで公私にとつては中間的で、かつまた共にある最も社会的な存在領域といえる互酬、ないし、より適切には「明確な目的性に即した自己限定」(ホワイトヘッド)をベースにしたボランティアな経済領域を経済社会軸として育てていくことが肝要となる。危機においてはこの緩やか

な機構が軸芯ともなるのはよく知られた事象である。戦争あるいは戦後の混乱期や災害における危機状況において然りである。この緩やかな軸芯をフランソワ・ペルーが言ったように人間の主体性を重視する人間主義（ユマニスム）的な経済^⑤として社会に育てていくことも可能であろう。このような経済社会機構は、「可能性に応じて提供し必要に応じて受け取る」社会機構となるのかもしれない。これは現代においては「ボランティア経済」ということができる人間の自主性自発性に基づく在り方であり、一人の生命存在がその存在性を軽んじられるときに、どうしてもなければならぬ、あえていえば社会構造である。これは、難民と呼称される人々、福祉問題を抱えるとして一括されている障得や貧困のなかにある人々、老いて孤立に苛まれている人々、順当に生き育つことを保障されない子どもたち、あまりに多く存在する生き辛さのなかに生きる人々全てを一人の人と受け止める思想を根幹とした愛による統合性に基づく実現機構といえる。

大転換の時代には、二重思考が蔓延する。それは隠蔽のなかで片方を隠して作られた思考であることが多い。そうして一定の敵が想定されると、それは曖昧なままに当該対象に向かって尖鋭化されていく。そうした時代であればこそ、愛による統合性の元にあつて、公私の足らざるを補うのみならず、共に生きるボランティア経済社会を形作り、それが公私の経済機構にその神髄を浸透させ真の「人間の経済」と「社会」を育てていく。それに応え得る重厚な思想の積み重ねが必須とされる現今である。それによつて時代に麗しさと優しさを取り戻さねばならない。この紀要に記された考察は、そのための尊い、潤い豊かな清流であると確信する。

注

- (1) ジョージ・オーエル『1984年』新庄哲夫訳、早川書房、一九七二年。(二〇〇九年、同社より高橋和久訳で『一九八四年』新訳版が出版されている。)
- (2) 同上書、二七三―二七五、および、三二四―三二六頁。
- (3) Karl Polanyi, *The great transformation* (Beacon Press, 1957). カール・ポラニー『大転換——市場社会の形成と崩壊』吉沢英成、野口建彦、長尾史郎、杉村芳美訳、東洋経済新報社、一九七五年。
- (4) Karl Polanyi (H.W. Pearson ed.), *The livelihood of man* (Academic Press, 1977). K・ポラニー『人間の経済1(市場社会の虚構性)』玉野井芳郎、栗本慎一訳、岩波書店、一九八〇年。
- (5) François Perroux, *Économie et société* (Presses universitaires de France, 1960). フランソワ・ペルー『経済と社会』岡山隆、堀川マリ子、堀川士良訳、ダイヤモンド社、一九六二年。